

令和6年度 公立小松大学入学者選抜試験
一般選抜（前期日程）試験問題

小論文

【国際文化交流学部】
国際文化交流学科

（注意事項）

- 1 問題用紙は指示があるまで開かないでください。
- 2 問題用紙は本文4ページです。答案用紙は2枚です。
- 3 答案用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 4 答えはすべて答案用紙の指定のところに、横書きで記入してください。
- 5 アルファベットや数字は、1マスに1字で記入してください。
- 6 字数制限のある解答については、句読点を1字と数えてください。
- 7 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

I. 次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

近年、アメリカやヨーロッパで国境を越えた文化を主張する人々、「ディアスポラ」と呼ばれる現象が注目されています。

その人たちの文化とは自文化でも異文化でもない、いわば脱固有文化を積極的に主張しようという考え方です。ディアスポラとは、自文化にも異文化にもどちらにも属さない、文化の間を生きることによって、それを創造の原動力にするような活動をする知識人のことでもあります。ディアスポラとは、もともとは祖国を追われた古代ユダヤ人の「離散」を意味し、流浪の民の状態を意味する言葉でしたが、ここでいうディアスポラとは、単に流浪ということだけではありません。自分のルーツを失い異国の社会に入って生活する単なる根無し草ではなく、かつて自分が属していた文化や新しく属する文化とは違う新しい文化を発展させ、「創造」していく人々を指します。

これは、文化的な少数者の立場から誰にでも共有できるような普遍的な文化をつくろうとする行為をも含むといつてよいかと思います。

芸術や大衆文化の分野などではディアスポラと呼べる存在が多くいます。たとえばハリウッドで活躍する香港の映画監督などもそうでしょう。彼らはディアスポラという立場を逆手にとって、創造的活動をしています。

しかし、固有の文化を持たないということは、個人や集団にとって非常に大きなマイナスであり、一種の欠陥として見られてきたことも事実です。文化のルーツをもたないこと自体、スティグマ(汚名、恥辱)として捉えられる傾向があるわけです。

デラシネという言葉がありますが、これは根無し草のことで、自分の文化をなくしてしまい、浮草のように異文化の中を漂う人たちのことを指しました。こうなったらおしまいだとよく嘲りの対象ともされました。デラシネとは、もっとも、有名な日本の作家のように自らデラシネだという人もいますが、本当のデラシネなら日本にいて仕事をするわけでもないはずともいえますが、日本社会にあっても根無し草のように、とくに民族や文化のルーツ意識をもたない存在をさすのかと思います。自らをそのように捉える現代人も少なくないでしょう。

またコスモポリタンという言葉もありますが、これには行き場のない人たちというような意味があります。ひところ、自国を出てパリに巣くう一群の人たちのことをコスモポリタンと呼んだことがあります。ヘミングウェイやフィッツジェラルドなどアメリカの若い文学者がパリに住んで文学活動を行い、それが「ロスト・ジェネレーション」とよばれて有名になりました。彼らの創作活動にはパリやヨーロッパという異文化環境が必要だったことでもあります。第一次世界大戦後の世界での、自国を離れて暮らすことの意味を象徴することでもありました。コスモポリタンには色々な意味がありますが、一般にはどこへ行っても自分の生活を確立できない人たちのことを指すネガティブな表現として使われました。もちろん自文化や自民族や自国中心主義を批判して開かれた国際性を強調する面でのコスモ

ポリタンにはよい意味もあります。

これに対してディアスポラというのは、むしろ積極的に、どこの文化にもどこの社会的価値にも属さないという立場、文化と文化の狭間、境界に生きるという立場が、グローバル化する社会にとって重要だと主張するものとして捉えるべきでしょう。

ですからディアスポラは、人間が新しい文化を創っていく場合のひとつの大きなきっかけになる存在ではないかとも思うのです。

(出典：青木保『異文化理解』、岩波書店、2001年、172-4頁)

問 1. 筆者の言う「ディアスポラ」とはどのような人々なのか。本文の内容に即して 70 字以内で述べなさい。

問 2. 筆者にとって「コスモポリタン」と「ディアスポラ」はどのように異なるのか。本文の内容に即して 150 字以内で述べなさい。

問 3. これからのグローバル社会はどのように発展すべきだと考えるか。あなたの考えを、以下の 4 つキーワードを用いて 300 字以内で具体的に説明しなさい。

キーワード：ディアスポラ、デラシネ、コスモポリタン、文化

II. 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

Parisa had been coming to international conventions on food processing for several years. She had made several good friends, especially from among the Europeans; but there was a gnawing problem which always came back unresolved. She was the only person at the convention who came from Iran; and no matter how friendly and sincere, she knew that her European colleagues saw her in a particular way which just wasn't her at all. It was from their passing comments, their casual, unguarded turns of phrase, in which they seemed to show surprise when she was creative, assertive or articulate, as though she ought to be somehow unable to be good at all the things she did. One of her colleagues did not actually say 'Well done!' but certainly implied it in her tone of voice. She also felt isolated as the only person from her particular background at these conventions. There was nobody else to represent who she was. It also hurt her when someone said that she was 'Westernized' and 'not a real Iranian'. This seemed like a no-win situation. If her behaviour was 'recognized', she was not real; and if she was considered 'real', she wasn't supposed to behave like that.

Then something happened which both confirmed her fears and gave her support. She invited three of her colleagues to see one of the films which was showing as part of a festival of Iranian films at the local university. They came willingly – very interested – and then to another one. When she asked one of her colleagues what she found so fascinating, her colleague replied that she was particularly impressed by the female characters who portrayed such strong women. Indeed, one of them played a major executive role in a film crew. She hired and fired people and drove around in a jeep. Her colleague said that she had no idea such women existed in Iran, and that she always thought Muslim women were supposed to be subservient. Parisa was also pleased because the women on the film were certainly 'real' Iranians in that they wore the hejab, and the woman who drove the jeep wore the black hejab and long coat that she imagined fitted the 'stereotype'.

注

convention 会議、大会

gnawing 不快な、つらい

friendly 優しい、親切的な

sincere 誠実な、偽りのない

colleague 同僚

particular 特定の、際立った

unguarded 軽率な、無防備の

assertive 自信に満ちた態度の、積極的な

articulate はきはきと話す、雄弁な

isolated 孤立した、隔てられた

implied 暗黙の、黙示の

willingly 積極的に、喜んで

portrayed 描いた

executive 管理職、重役

subservient 従属する、卑屈な

hejab ヒジャーブ（イスラム教徒の女性が顔を隠すために用いるスカーフ）

(出典：Adrian Holliday, Martin Hyde and John Kullman. *Intercultural Communication: An Advanced Resource Book*. Routledge 2004, p.6-7.)

問 1. 下線部について、イラン人のパリサ(Parisa)は国際会議に参加する際、ある問題に出会った。どのような問題であったのか？本文に即して、200 字以内の日本語で説明しなさい。

問 2. なぜこのような問題が発生したのか？この問題を解決するためにはどのようなことが必要なのか？本文の内容を踏まえて、あなたの考えを 400 字以内の日本語で述べなさい。